

【資料I】

解説

住井すゑの同名小説を映画化。原作は第七部まで刊行された。本映画化の際には、第四部までが出版されており、明治末期から大正にかけて未開放部落に生まれた二人の少年を主人公とし、彼らがさまざまな差別と圧迫に屈せず、それを乗り越え、解放をたかいたるために全国水平社を結成するまでの物語である。小説が発行された時の反響は凄く、数十万部ベストセラーとなり、最終的に七部までを合わせると六百万部に及んだ。作品は、島村藤村の名作「破戒」の主人公・丑松が差別に耐えかねて国外へ出てしまうという生き方をのり越えているという点においても高く評価された。本映画(第1部)の物語は、原作の第一部、第二部にあたる少年編を映画化したものである。

奈良盆地の未開放部落小森、父を日露戦争で亡くした誠太郎と幸二は、祖母ぬいと母ふでに育てられていた。ある日、同じ部落の藤作の家から火が出た。息子の武が空腹の弟に豆を炒つてやるうとして火を出したのだ、責任を感じた武は自殺。藤作は小森にも消防ポンプを買ったと叫ぶ。

明治四十五年、天皇崩御の夜、子どもたちは校庭に集められた。好意を寄せているまぢえに手を握られた幸二は素直に喜んだが、まぢえは部落の人間は、夜、手が蛇のように冷たくなるという大人の噂を確かめたのだと告白。

やっと小森に新しい消防ポンプが届いた。部落対抗の提灯落として勝った藤作たちの目の前で優勝旗は焼かれてしまった。幸二たちに改めて、部落差別への怒りがこみ上げてくる。

あらすじ



「人間が同じ人間を一方的に差別したら、差別された側は一日も生きて行けまい——ということを、見ている間じゅう、痛いほど知らされた。(中略) ことを使うのがうまい今井演 出は、メロドラマの形で、問題の深刻さを静かに訴える。理由のない差別のなかで、子どもたちが戸惑う姿は、どんなドラマよりも、見る者を圧倒する。映画を見なれた者も、思わず泣く。ひどい」(朝日新聞(9年2月1日付))

[資料Ⅱ]

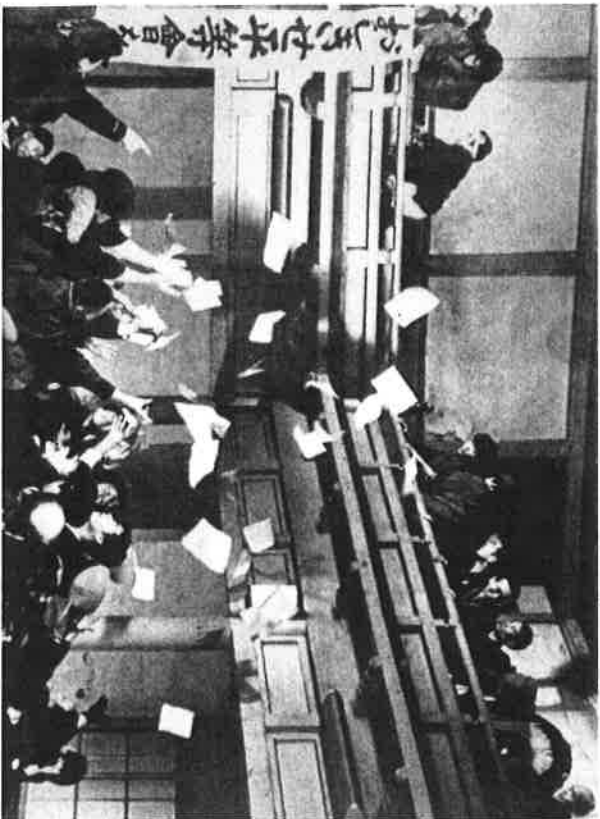
解説

住井するによるベストセラー小説の映画化。原作の第三部、第四部を描く。亀岡での撮影中、部落解放同盟の妨害が始まり、監督は京都の解放同盟に呼ばれて糾弾を受けた。映画完成後も上映阻止運動が起こる。これは映画の内容云々より、当時激化していた共産党と解放同盟の対立が主要な原因だった。

当時高校生で上映阻止運動に参加していた灘本昌久は、「日共系の映画監督である今井に良い映画が撮れるはずはない、映画は見てみなければわからないなどというは日和見主義である。部落解放運動を我が革命的潮流に獲得するために、断固闘わねばならない、とまあこういうのである。映画の中味から出発しているのではないから、軌道の修正のしようもない。(中略)製作妨害や上映阻止がなく、今井監督が、第

孝二は高等科を優等で卒業したものの、部落出身と分ると解雇され今は部落で靴職人として働いていた。兄誠太郎は、米問屋に奉公し、主人に好意をもたれていたが、娘との仲を知る主人の態度は一変する。大阪に身売りしていた藤作の娘夏は、部落の青年と心中。孝二は小森で教師として働くまちに再会し、差別による厳しい現実を話す。国内は米価の高騰で米騒動が起こる。寺の息子秀昭が東京から戻ると、部落に新しい動きが起こる。大正十一年政府が善頭とする融和団体「平等会」の創立大会に部落解放運動の先頭に立つ秀昭が現れ、真の部落解放を願う人々と共に「部落民は自らの手で差別と貧困を追放せよ」「水平社万歳」のビラを撒く。はじめての人間言といわれる水平社創立の第一歩であった。

あらすじ



一部の調子で三部まで撮影できていたら、どんなにいい映画になったかと思うと、痛恨の極みである」(「今井正通信」37頁39号)と述べている。

第二部は、「大正時代のシベリア出兵 米騒動を中心に、激動する日本の姿が今井正演出によって、力強く描かれる。当時のわれなく差別されていた人びとが、どんな思いで生きていたか。それが見ているわれわれに激しい怒りを投げかける。(中略)全編にわたって、北林登栄、長山藍子はじめ女性の生き方がうまく描かれ、良質の女性映画になっている。(中略)女の悲しさをきびしい目でみつめて来た今井正監督の、ひとつの頂点ともいべき作品」(朝日新聞70年4月28日付)などと評された。

暮らし・家庭

無許可で販売はできません。2010年、国内で

味でニコチンが検出され、問題となりました。

触れ込みで売り出され、世界的に広がったとい

れくらしい商品が回って

し、口腔粘膜に作用し、口腔がんを引き起こす危

平和への祈り

①…… 西橋 正泰

のお願いに行ったので。住井さんの家と芋

番組では、芋銭の「夕風」という作品に

る。命を宿そうとして

す。「お祖母ん。わし、

文化とは命を守ること

井さんの代表作「橋の

き、「21世紀に必要な



イラスト フルイミエコ

茨城県牛久沼のほとりにある、作家・住井

弟の父親・進吉は日露戦争で戦死していま

と、にこやかに微笑んでいました。

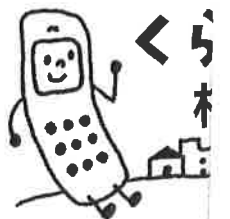
(金曜掲載)

女性のひろば

『女性のひろば』

11月号

巻頭は、知事選勝にたちあがる沖縄の女性たちのインタビュ集です。戦争と軍隊



くらし

(抜粋) 映画「橋のない川」上映阻止は正しかったか 今井正版・東陽一版を見て
部落問題全国交流会事務局『第9回部落問題全国交流会報告書』、1993年4月

灘本昌久

小森部落の近くで陸軍大演習があり、村々には宿泊の割当がある。しかし、小森部落には宿泊の割当はない。そんな中、畑中誠太郎・孝二の母ふで（長山藍子）は少ない食料の中からさつまいもをふかして子どもを連れて差し入れに行く。寒さと飢えの中で兵隊達は感謝の言葉もない。そして、話をしているうちに、ふでの夫進吉が日露戦争で戦死していることを知る。“ああ、この寒い中差し入れを持ってきてくれるのは、この婦人が戦争未亡人だからだ。そして、この子たちは戦争遺児か。”兵士たちは誠太郎、孝二の頭をなでて感謝の言葉を述べる。ふたりは、兵士たちと心の交流ができて最高の気分だ。次の日、小学校では地主の子佐山仙吉が得意満面だ。軍用の双眼鏡を持ってきて皆にみせびらかし、兵隊を泊めるために寝具は新調しご馳走を準備していたのに、訓練の事情で泊まってもらえなかったのは残念だと、鼻高だかにいいふらしている。そして、「小森はいいな、兵隊さんが泊まらへんから」と悪態をついた。すると、永井藤作の娘しげみが言い返す。「小森は畑中誠太郎たちがさつまいもをふかして差し入れをしたので、結果的になにもしなかった佐山たちよりも上だ」。ところが、仙吉は言い返す。「あの兵隊さんは名古屋師団で、このへんのことは、なんにも知らんからや。もし誠やんが小森の者やいうのわかったら、なんでそんなさつま食うもんか。かわいそうに、負けいくさの兵隊は、とうとうエッタのさつま食いよった。くうさい、くうさい、エッタのさつま食いよった。ははゝゝゝ」。

仙吉の指摘した差別の現実の前には、前日の兵隊たちとの楽しい会話も、幻のように粉々にうちくだかれざるを得ない。その差別の現実には、誠太郎・孝二は八つ裂きにされたのである。

ここから小森の子どもたちと佐山仙吉たちとのあいだでの乱闘、教師による誠太郎たちへの一方的断罪、祖母ぬい（北林谷栄）の校長への抗議とつながっていく。「わいら生まれてこの方、世間の人からエッタ言うて人間扱いされんと来ましたんや。せやけど、わしらかて人間や。手も二本、足も二本ありまんがな。指かて、見ておくなはれ。せやけど、世間の人わいらをエッタ言うて、けだもんみたいに言いまんねや。なんぼ自分で直そ思うてもエッタは直せまへん。校長先生、どねしたらエッタが直るんか教えとくなはれ。」当時は、聖域と考えられていただろう職員室に無学文盲の老女が乗り込んで、しかも校長に詰めよるといのは、現実には不可能に近いことであつたかもしれないが、北林谷栄の迫真の演技で見るものの心に迫る。

地主の佐山家の家の庭には、小作人が年貢を大八車に積んで、続々と運んでくる。ある一般の小作人が、小作料が高いとおずおずと苦情を言う。すると番頭は、小森のもんなら年貢をもう一俵よけいに納めるので、いつでも土地を返せとおどかすと、小作人はぐうの音も出

ずに引き下がる。

次は、ぬい・ふでたちの番だ。番頭は、「ええ米や」と一言。ここでぬいは、飲んだくれの永井藤作に田を借りてもらってくれと頼まれていたのを思い出す。頼まれた時には、「米の水にでもなるんやろ」と相手にしていなかったが、その場の雰囲気ですり出されるかも知れないと思い、藤作への親切心で番頭に頼む。ところが、番頭は憮然として言い放つ。小森の者には土地は貸さない。お前のところは、息子が名誉の戦死やから貸してやっているのだ。だいたい、このあいだ、お前ところの誠太郎が仙吉ぼっちゃんを怪我させたのだ。そんな頼みごとができるとはいいい根性だ。うちの旦那さんは、人間ができてから息子に怪我をさせられても田を取り上げるとようなことを言い出さないのだ。ありがたいと思え。

ぬいたちは、孝二が仙吉をなぐったのは仙吉が差別をしたことに原因があると内心怒りを覚えつつも、番頭に謝って引き下がるしかない。このように、「橋のない川」第一部では、差別社会の中で声をあげられない部落民の置かれた立場、行動の必然性が伝わってくる。

終わりに至るまでに、部落解放同盟の「橋のない川第二部 糾弾要綱」で差別だと指摘されている場面があちこちに出てくる。そして、差別だと納得させられるところが、一つもないのだ。そのひとつひとつを検討していくのは煩雑にわたるので、よく知られているところを紹介しておく。

ひとつは、飲んだくれの永井藤作が列車で席を横取りする話である。どんなに部落民の否定的な像を誇大に描いているのかと思って見ていると、たいしたこともないシーンだ。部落の中でも飲んだくれでだめなやつと見られている藤作が社会の基本的なマナーからはやはずれたことをして、それを同じ小森部落の畑中孝二が「難儀なおっちゃんやなあ」とたしなめるだけのシーンだ。あのシーンを見て、部落の人はああなんだと思う人は既にそうした部落観をもっているのだろうし、そうでない人には、部落にいる難儀なおっさんの非行にし過ぎない。あれで、差別意識が増幅したりするような種類のものではない。

この藤作のむすめしげみが畑中孝二に蛇を投げるシーンも同様である。「孝ちゃん、蛇きらいか……うち、好きや。焼いて食べたらうまいで」というセリフはここだけ取り出すと、あるいは不快に感じる人もいるだろうが、ここでは字句どおりに蛇を食べる話にとってはいけない。孝二に好意をいだくしげみが、蛇に驚く孝二をからかうためにわざといているシーンなのだ。思春期になるかならないかの若い子どもにありがちなほほえましい感情表現とるのが普通の見方だろう。もっとも、ここあたりこそ実際に映画を見てもらうしかないが。

〔資料Ⅳ〕

今井 正 監督

経 歴

(いまいただし) 1912年1月8日、東京 渋谷に住職の子として生まれる。

旧制芝中学校時代よりマルクス主義と映画に関心を持ち、1935年、東京帝国大学に進むが検挙数回に及び結局中退。

当時「前科者」が入れるのは映画会社くらいだったからという理由でJ・Oスタジオ(現東宝)に入社する。

1939年「沼津兵学校」で監督デビュー。

戦中は、日本の武装警官が朝鮮の抗日ゲリラを撃退する『望楼の決死隊』(1943年)など戦意高揚映画を製作させられる。後年、今井は「私の犯した最も大きな誤りで深く反省している」と述べている。

戦後は一転、民主主義を高らかに謳った青春映画1949年「青い山脈」、戦争で引き裂かれる男女の純愛を描く1950年「また逢う日まで」の2本が高い評価を得て大ヒット、青春、悲恋ものの金字塔を作る社会派監督として名を馳せる。

そして、今井正は黒澤明と並ぶ東宝のエース監督として将来を期待された。

しかし、「また逢う日まで」を撮った直後に東宝争議が始まり、共産党員だった今井自身は追放されなかったが、朋友亀井文夫や山本薩夫が解雇されたので自ら東宝を辞め、私財を投げ打って独立プロを設立した。

しかし、仕事がなくしてしばらくは廃品回収をして生計を立てたという。それ以後の映画は会社の方針に縛られることなく彼の自由な表現で撮ることができ、どれもが高い評価と興行収入をあげる結果となった。

以後は、 1951年「どっこい生きてる」

1952年「山びこ学校」

1953年「ひめゆりの塔」

1953年「にぎりえ」

1955年「ここに泉あり」

1956年「真昼の暗黒」

(カルロヴィ・ヴァリ国際映画祭世界の進歩に

最も貢献した映画賞受賞)

1957年「米」

1957年「純愛物語」(ベルリン映画祭監督賞受賞)

1958年「夜の鼓」

1959年「キクとイサム」

1963年「武士道残酷物語」(ベルリン映画祭グランプリ受賞)

1969年「橋のない川 第一部」

(モスクワ映画祭ソ連映画人同盟賞受賞)

1991年「戦争と青春」

(モントリオール世界映画祭エキュメニカル賞受賞)

などを発表し国際的な賞も多数受賞している。

特に最盛期に撮った『また逢う日まで』『にぎりえ』『真昼の暗黒』『米』『キクとイサム』の5本がキネマ旬報ベストワンとなり、今井は「ベストワン男」と呼ばれた。

因みに『青い山脈』は2位、『どっこい生きてる』は5位、『ひめゆりの塔』は7位・『ここに泉あり』は5位、『夜の鼓』は6位と、この時代の日本映画は今井の独壇場といえる活躍だった。

厳しい演技指導は有名で、何度もやり直しをさせられた有馬稲子は自殺したくなったというし、実際交代させられた女優もいる。『真昼の暗黒』は八海事件を元に冤罪をテーマにしたもので、まだ裁判継続中の事件のため最高裁から中止を求めて圧力がかけられたが屈せず映画化を進めた。

今井監督の真の偉大さはこのように会社や権力など誰にも阿ることをせず信念を持って映画製作に取り組んだことであった。

1991年11月22日死去。享年80歳

故山本薩夫と共に、戦後日本を代表する社会派監督として、反戦、反差別の視点を貫き通すその姿勢は今も変わらない。

高校時代からマルクス主義に傾倒し、何度もの検挙歴を持つ今井も、戦時下にあっては戦意高揚映画を撮らされ続けるという屈辱を味わった。その反動は敗戦翌年の民衆の敵の腐敗した財閥の告発となって現れ、以後もレッドバージなどによる妨害に遭いながらも『ひめゆりの塔』『海軍特別年少兵』といった優れた反戦映画を生み出した。また『どっこい生きている』『キクとイサム』『橋のない川』など差別問題を正面から扱った作品を堂々と発表し、死刑囚の冤罪を訴えた『真昼の暗黒』では世論を動かして、映画の社会的影響力を高めた。

しかし一遍の劇映画としてみた場合、こうした主張性の高い作品よりも『青い山白』『また逢う日まで』『にごりえ』といったややソフトタッチの作品の方がより魅力的なのは皮肉なことである。重い主題を内包する『越後つつしい親不知』でも、リアリスティックでない描写がかえって効果を上げている。

参考：世界に誇る日本の映画監督 1より
文藝春秋 『日本映画ベスト150』執筆・細川まもる より